

## 4 調査結果のまとめ

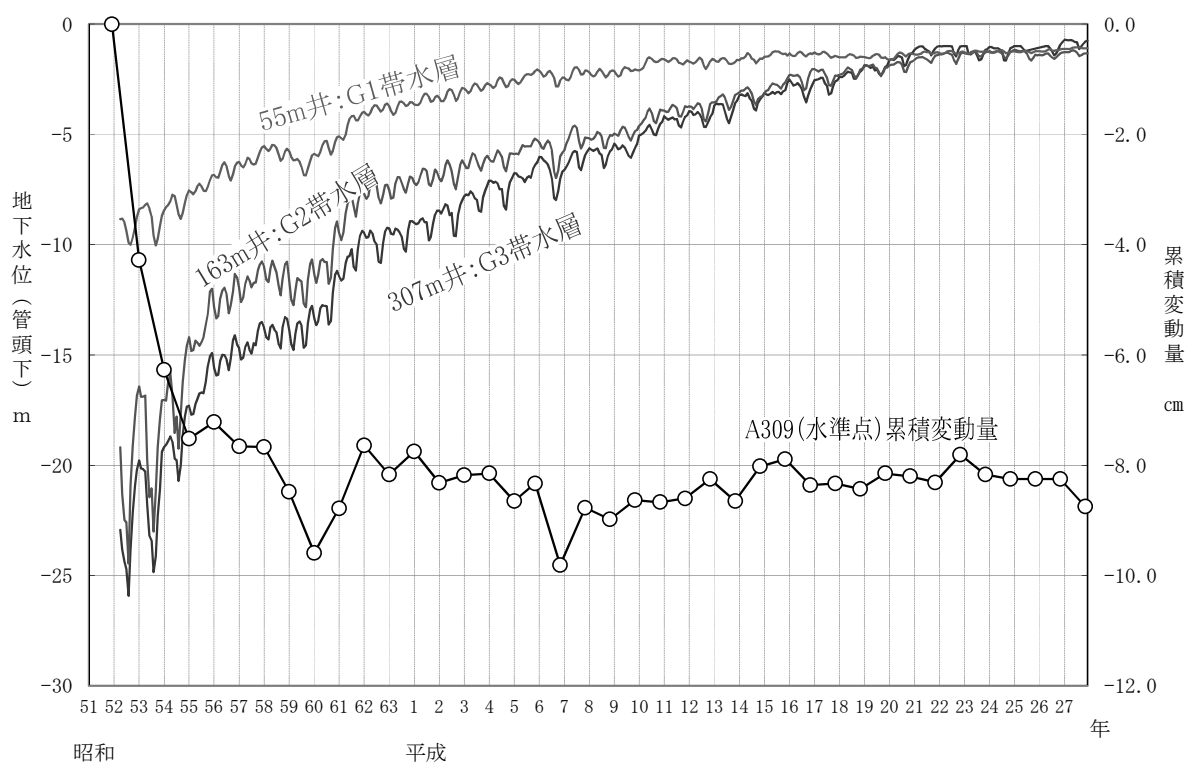
### (1) 尾張地域

2月、5月及び10月に降水量が少なかったが年間降水量は平年を上回った(資料-6)。揚水量は昨年と比べわずかに減少し、地下水位は昨年と比べやや上昇傾向であった。1年間に1cm以上沈下した水準点は3点観測されたが、沈下域は見られなかった。

地盤沈下と地下水位の関連について、累積最大沈下点「A3-4」近くの十四山地盤沈下観測所の地下水位と同観測所にある水準点「A309」の累積変動量を例として図4-1に示す。地下水揚水規制実施以降、長期的には地下水位上昇に伴い沈下速度は鈍化し、最近では微少な隆起沈下を繰り返しながら沈静化している。

一方、沈下しやすい軟弱な粘土層が厚く堆積している尾張西部では、最近5年間で数cmの沈下をしている水準点があり、緩やかではあるが依然として沈下の傾向が見られる。

以上のことから、長期的な地下水位の上昇に伴い地盤沈下は沈静化しているものの、西部には軟弱な粘土層が厚く堆積していることや地下水位が低下することは、地盤沈下の発生につながることから、今後も注意深く観測していく必要がある。



注) 地下水位は次年の目盛りまでの間を12分割して月平均水位を表示している。

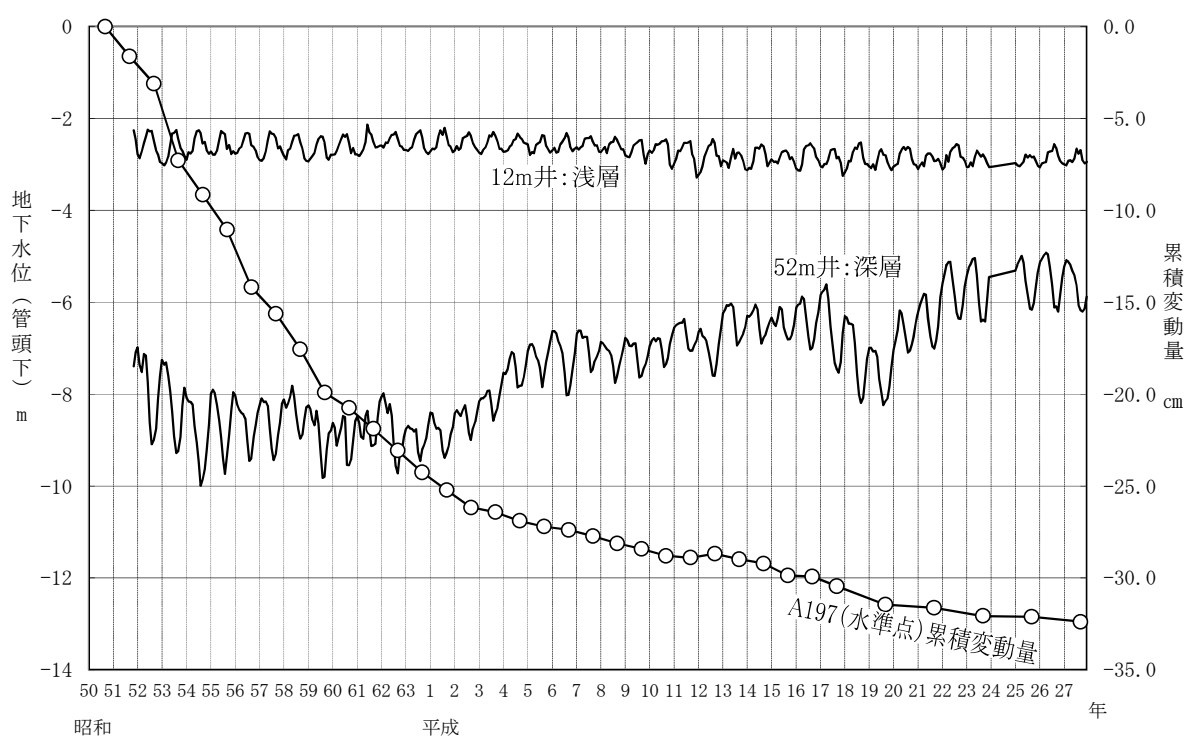
図4-1 十四山地盤沈下観測所における地下水位及び水準点「A309」累積変動量

## (2) 西三河地域

年間降水量は平年を上回る結果となったが(資料-6)、地下水位は昨年と比べ概ね同程度であった。また、平成25年からの2年間で1年当たり1cm以上の沈下を示した水準点はなく、沈下域は見られなかった。

矢作古川流域においては、昭和50年代後半までは地盤沈下域が生じるなど大きな沈下が見られていたが、地下水揚水量の減少とともに昭和60年以降は緩やかな沈下となっており、近年では1cm以上の沈下はなく、ほぼ沈静化の傾向を示している。

地盤沈下と地下水位の関連について、矢作古川流域の吉良地盤沈下観測所の地下水位と同観測所にある水準点「A197」の累積変動量を図4-2に示す。長期的には、昭和60年以降、地下水位の上昇とともに地盤沈下は鈍化・沈静化しているが、今後も地下水位と地盤の変動に注意する必要がある。



注) 地下水位は次年の目盛りまでの間を12分割して月平均水位を表示している。

図4-2 吉良地盤沈下観測所における地下水位及び水準点「A197」累積変動量